

# 子ども・若者にとっての居場所の意味再考

## 身体的自己の抑圧と生成の関係構造分析から

Reconsideration of meaning of “I-basho” for Youth From Phenomenological Analysis about Embodied Self

萩原建次郎

HAGIWARA, Kenjiro

**【要旨】** 本稿は「自己（わたし）」が身体性を帯び、関係的な存在であることを明らかにしてきた現象学の見方に依拠しながら、子ども・若者にとっての「居場所」の意味と存立構造を解明する試みである。

まず子ども・若者の居場所喪失をめぐる体験レポートを主な手がかりとして、彼らの経験世界をたどったとき、居場所喪失に他者との関係性が大きく依拠していることが明らかとなる。そこでは子ども・若者の居場所を剥奪する力が直接的な他者のまなざしにあるだけではなく、都市化する地域の変容（「三間」の衰退）自体にも、それが内包されていることが見えてくる。

目を転じて子ども・若者の自己（わたし）のありように目を向けると、他者からの一方的な関係の規定において自己生成機会を失い、自己の空虚化をもたらしている事態がみえ、他方で、自己が他者をモノ化していく事態がみえてくる。これらの考察から、「居場所」が身体的自己の抑圧と生成の経験と表裏一体となって現象化していることが明らかとなる。

以上のような現象学的考察により、居場所の生成と喪失の構造は他者との〈関係性〉、自己の生成基盤としての〈身体性〉、自らの位置取りと方向感覚とかかわっての〈時間性〉の要素と深く結びついている経験であることが解明される。

キーワード

「三間」の衰退、身体的自己、生き生きとした世界体験、他者のモノ化、位置感覚

## 1. 行き場と息つく場のなさを表現する「居場所」ということば

自転車を通りを走る時、歩道を走ると、歩行者から邪魔者扱いの視線が注がれる。かといって車道を走ると自動車から遠慮なくクラクションが鳴らされる。その時僕はいつもこの自転車の置かれた状況は、中学生の時期に似ていると考えたりする。

小学生の時は「子どもは遊ぶのが仕事」といった具合に校庭の開放があったり、近所の公園など遊び場はいくらでもある。高校生になると、下校に寄り道もできるし、バイトもできる。

でも中学生には（少なくとも中学生の自分には）地域に遊び場という場はなかった。もちろんバイトもできないから金もないし、公園では小学生の保護者から冷たい視線。まるで違法駐輪の自転車のように、どこにも止める場所のない自転車のように、学校と家の間の社会に僕の居場所はなかった。それでも中学生には自転車しか乗る物がなかった。

ここに紹介した文章は、私の講義を受講する学生たちに子ども時代を回想してもらい、「居場所がないときはどんなときか」をレポートしてもらったものである。

ここでは「中学生の僕」が、「学校と家との間の社会」、すなわち地域という場に居場所がないこと、そして、「僕」に向けられる大人たちのまなざしが、いかに排他的であり、冷たい視線として経験されているのかがみてとれる。

そこでは小学生でも高校生でもない、「中学生という僕」の存在が、「違法駐輪の自転車」のごとくこの社会に安心して住まい停留できる場、息のつける場と行き場を失い、家と学校以外の社会において宙吊りの状態にさせられている。

このような「居場所のなさ」はどこからやってくるのか。逆に「居場所」とは子どもたちにどのような意味をもたらししているのだろうか。近年では「高齢者の居場所」「中高校生の居場所」「若者の居場所」「障害者の居場所」「子育てママの居場所」など、「居場所」と結びつく対象範囲は広がる一方である<sup>1</sup>。そこには彼ら彼女らを支えてきた家族や地域コミュニティの衰弱化と援助・支援する社会資源とそのネットワークの脆弱さ、教育と貧困と就労困難の問題、といった問題群が横たわる。その意味で「居場所」ということばは、世代や属性を串刺しにして、何かしらの〈生きづらさ〉や〈息苦しさ〉〈行き場のなさ〉を表明することばとして広がりを見せている。

逆にそれらを乗り越える、あるいは癒す場として「居場所」ということばが呼び出されているのだとしたら、それを読み解くことは、この時代の諸問題の構造を根底からつかみ直す糸口を与えてくれるのではないだろうか。

「中学生の僕」のように、私たちが居場所を感じとったり、失ったと感じたりするのは、それが関係性の次元、言いかえれば相互主観的な次元で、感性的・経験的につかんでいるからにほかならない。そうした相互主観的世界で生成する居場所は、実体としては捉えることのできない次元である。そうした次元に分け入るために、本稿では子どもたち・若者たち、そして大人たちの回想事例を手がかりとしながら、私たちの個別具体的な経験世界において、居場所がどのような存立構造をなしているのかを明らかにしたいと思う。

## 2. 居場所を奪う社会の構造体は日常においてこそ経験する

ところで子ども・若者の居場所が語られるようになって、すでに20年以上の年月がたつ。冒頭の事例にあるような、地域・社会という場から子どもたちが排除されていく問題はいまに始まったことではない。当初、「子どもの居場所」ということは、不登校の子どもたちとその親たちが手づくりでフリースペース運動を始めた頃に、当事者から語られてきたものだった。学校での居場所を失い、学校と家庭の間の社会にも行き場と生き場をつくる取り組みとして始まった運動だが、そこには、すでに70年代に地域青少年教育関係者から〈三間〉の問題として指摘されていた事態と重なり合うものがあった。

〈三間〉というのは、子どもたちの遊びの仲間・時間・空間の三つの〈間〉を合わせて表現した社会教育の造語であるが、それが変容したといわれはじめてのが1970年代頃からであった。当時の状況としては、遊び仲間が多人数異年齢集団から少人数同年齢集団への変容がはじまっていたこと。子どもの時間が、充実したいまの連続性に満たされるアナログな時間から、塾やお稽古事に分断され、ビジネスマンと同様にスケジュール帳を片手に遊び時間を調整する細切れのデジタルな時間へと変容を余儀なくされていったこと。都市化の進行によって、子どもたちの遊び場が幹線道路によって分断され、地域での子どもの遊び空間が狭められていったことが、子どもの世話をしてきた大人たちから危惧の念として指摘されていたのだった。

それ以来、子どもたちは、大人たちと共同の生活空間からも切り離され、児童公園や、学校空間といった目的・機能的な均質空間へ囲い込まれていった。しかも実態として、児童公園もボール遊び禁止・火遊び禁止・自転車乗り入れ禁止など、いくつもの禁止事項が並べられた使用条件の看板が立ち、実質的には子どもたちがのびのびと創造性を発揮して遊べる空間とはいえない状況にある。

ところでJ. デューイが指摘したように、われわれの経験が自己と他者とのふれあいとコミュニケーション (contact and communication) において成り立つ以上、〈経験〉は社会的な営みであり、個人の主観世界に閉じられたものではない。その意味で、冒頭の事例にある「学校と家の間の社会には居場所がない」という「中学生の僕」の経験は、地域社会が子どもの活動空間を排除してきた歴史の構造体に出会うことでもある。

「中学生の僕」は、目的志向的な合理主義と機能主義に支えられた都市空間と、そこに生きる大人の視線において社会の「冷たさ」を経験し、同時に行き場のない「僕」という存在を経験している。このように、社会と「僕」の存在の仕方は、対照関係として同時に経験されている。

このように日常が複合的重層的な社会の構造体として経験されるがゆえに、子ども・若者が理性的に認識したり、言語レベルで表現したりすることはかなりの困難をともなうのである。「居場所がない」という子にその原因をがいくら要求しても、口ごもり、立ち尽くすしかないのは、日常において感受されるその内実が、子どもの言語表現と知的理解の範囲をはるかに超えているからなのである。

## 3. 身体的自己と交流する現実世界

では逆に子ども・若者はどのようなとき、居場所を感じているのだろうか。かつて都内のある

小・中学生の保護者に「子ども時代を回想して、あなたの居場所はどこでしたか。」という質問を投げかけたことがある。そのときに寄せられた回想レポートを紹介したい。

小学生時代は、家に入る瞬間にほっとひといきついた記憶があります。外では少し緊張していたのかもしれませんが。何か話したいことがあるときは、母が家事を終え、休んでテレビの前にいるときにこっそり近寄って、なんとなく話をはじめていたような……

母の目の前で座るときが、いちばん素の自分になれたかもしれません。(Aさん)

その時の気分で一人になりたい時は部屋にこもり、机に向かっていた。ピアノを弾くことで精神的な落ち着きを得ていたのもので、ピアノの前も居場所だった。(Bさん)

ここでAさん、Bさんにとって居場所は、「素の自分」に戻れる場、「精神的な落ち着き」を得られる場として経験されている。そこには気取らない会話があり、さりげないふれあいがあり、無条件に受け止めてくれる母親との関係があったり、「ピアノを弾く」ことでその曲の世界を自らの身体的行為を通して表現しつつ、同時に楽曲に身を溶け込ませていくなかで精神的な落ち着きを得る世界がある。

「ピアノを弾く」という能動的な身体的行為と居場所の関係に注目すれば、まず、ピアノの前の「わたし」は身体的な存在としてピアノと共に在る。しかし、いったん弾き始めると、指先は一音ごとに意識せずとも流れるように、正確にピアノの鍵盤を叩く。そこでは「わたし」という身体＝ピアノの鍵盤である。同時に奏でられる音は、不連続な音の集まりではなく、連続的な音のつながりとして、ひとつのまとまりをもつ生きた全体としての〈曲〉となって現象する。それを通して弾き手は作曲者が感受した世界へと誘われ、ピアノを弾きつつ、私たちは自己の主観世界を超えた曲の世界と出合う。

それが人であっても楽器であっても、身体的なかかわりにおいて能動的に対象に触れ、対象から受け取る受動的な契機が、私たちの一個の具体的な「わたし」という存在とともに他者や事柄の世界を感受させてくれるのである。このようにあるときは曲に身を浸すことで、またあるときは母親や父親のかたわらに座って安心し、「わたし」という意識の縁どりからも開放され、「素の自分」へと戻っていくのである。

そうした「素の自分」へと立ち戻ること、「わたし」が溶解して世界との境界があいまいとなる体験を、矢野智司は村野四郎の詩「鉄棒」を紹介しながら、生き生きと描き出している<sup>2</sup>。

僕は地平線に飛びつく  
僕は指先に引かかった  
僕は世界にぶらさがった  
筋肉だけが僕の頼みだ  
僕は赤くなる　僕は収縮する  
足が上がってゆく  
おお　僕は何処へ行く  
大きくなる世界が一回転して

僕が上になる  
高くからの俯瞰  
ああ 両肩に柔軟な雲

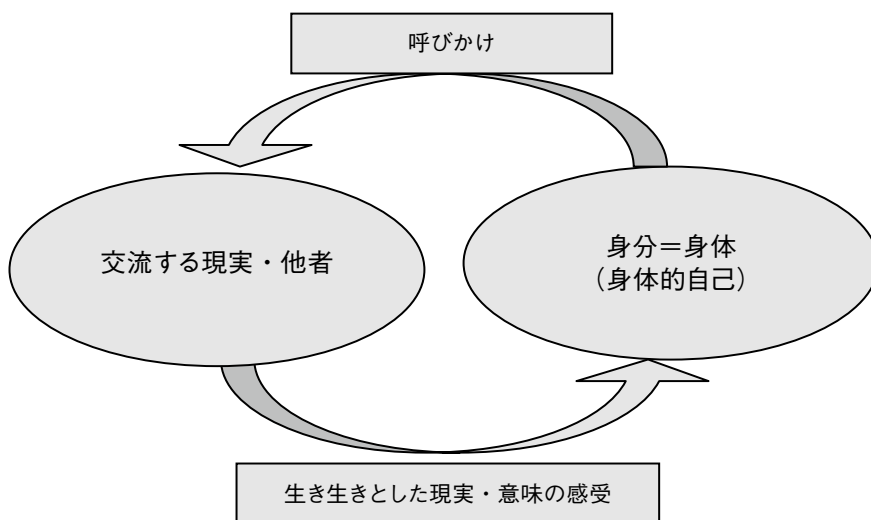
ここでの「僕」は身体そのもの、筋肉そのものであり、「世界にぶらさがり」、「地平線に飛びつく」ことそれ自体が「僕」である。「僕」にとっては鉄棒にぶらさがり、体全体で一回転するという経験は、「大きくなる世界が一回転」することであって、私たちが子ども時代に経験した逆上がりの、まるで地上と天がひっくり返るようなめまい体験が、ここに生き生きと描かれている。矢野は、このように村野が描き出す世界には『「私」と私を取り囲む世界との間の境界が消えていく』ような「溶解体験」さえ生じていると指摘する。

それは肉体を意識主体としての「わたし」がコントロールするという、二元構造の身体図式ではなく、世界を経験するのがこの私の身体であり、身体が私であるという次元での存在の仕方である。こうした存在様式を「身体的自己」と呼ぶならば、身体的自己としての「僕」は、自我意識が縁取る主観世界の境界を越えて、刻々と変化する世界をありありと感受し、驚き、感嘆し、自己もまた変容をしている様子がみてとれよう。その意味で「世界に溶け込む」という経験は、世界との生き生きとした交流体験であり、同時に生き生きとした（actual な）世界体験でもある<sup>3</sup>。

このような身体的自己を現象学では「生かれた身体」と呼ぶが、これらは意識主体としての「わたし」が、対象として所有し操作し支配するモノとしての身体ではなく、私たちの経験の基盤を与えている身体である。それは自己（わたし）の存在基盤であり、未知の世界との交流可能性へと開かれた身体である。

そのようにみると、「素の自分」や「あるがままの自分」「自分らしさ」と表現されるのは、生き生きとした現実との交流において立ち返ることのできる、あるいは感受される身体的自己のこ

図 1



ととして了解できるだろう。そうした身体的自己と現実との関係性を図式化すれば、図1のようになる。

それは、つぎの表1で示した保護者へのアンケートで寄せられた、それぞれが思い描く居場所のイメージとも重なる。そこには応答してくれる他者が居て、安心とくつろぎや、自らの関心をいまここで集中できる場であったり、他者や事物・自然に対して「伸び伸びと」かかわることのできる場のイメージであったりする。

では、なぜ私たちは居場所の「なさ」を感じることもあるのだろうか。そこで経験される世界（他者・事物・自然）ではどのような関係が取り結ばれ、世界と自己はどのような存在の仕方をしているのだろうか。

表1

居場所とは……
自分に愛情をそそいでくれる人が居るところ
自分を必要としてくれる人が居るところ
無条件で自分を受け入れてくれるところ
自分のことをよくわかってくれている人の居るところ
話し相手が居る場所
安心してくつろげる場所
自分が伸び伸びとして居られる場所
自分が自分らしく居られる場所
好きなことを集中してできるところ

#### 4. 閉じられた主観世界に囚われる「本当のわたし」とモノ化する他者

今までの経験のなかで「自分の居場所がない」と感じたのは結構あるけど、やはり印象的なのは、中学時代の交友関係だ。当時本当に仲の良い親友と呼べるものはいなく、中途半端に不良じみた輩と共に行動していた。その当時自分を思いっきり出すことはなく、無理して周りに合わせていた。もちろん自分でも息苦しさを感じていた。とくに親なども普通に生活している私をみて心配することもなく、友達にも明るく接していたせいもあり、周りから見たら普通に生活しているように見えたであろう。

このように他者への同調と「自分」の息苦しさを感じられないように「普通に」「明るく」ふるまう関係の構造は、とくに友人関係の場面で語られることが多い。そこでは他者に同調し、身体的自己を自ら抑圧している事態が見えてくる。そこでは生き生きと世界と交流していた身体的自己は行為の後景にひきこもり、そのかわりに外部に向けて偽装した自己が、他者との接触場面に

せり出す構造をとっている。つぎの事例はそれが鮮明に描かれたものである。

居場所がないときは、わかりあえる人がいなかったとき。周りと考え方が違うと思っても合わせなくてはいけなくて、でも合わせきれないとき。そしてそのままの自分でいられないとき。“こういうふうに思われている”と思って、そういうふうに自分をつくっている。自分を素直にだせない。つまり、趣味や好きなものからはじまって、考え方や強さ、弱さなどいろいろ含めて本当の自分を受け入れてもらえんと思えない。本当の自分でいられるところがどこにもない。

ここには「強さ、弱さなどいろいろ含めて」の「本当の自分」を受け入れてくれる他者との関係を希求しつつ、他者から思われているような自己を演じようとせめぎあう自己がありありと描かれている。こうした身体的自己が二つの自己にひき裂かれ、二重構造をとる自己のありようを、精神医学者の R.D. レインは分裂病質者の現象学的考察を通してつぎのように述べている<sup>4</sup>。

自己は、身体化されないことによって世界を超克し、安全であろうとする。しかし自己は、すべての体験や行動の外に自分があると感じるように発展しがちである。自己は真空になる。あらゆるものがあなたに、外側にある。こちらには、内側には何もない。さらに、あなたにあるすべてのものに圧倒されるという不断のおそれが、世界を寄せ付けまいとする欲求によって軽減されるどころか、助長される。

さきほどの例にあげた学生にとって、「本当の自分」でありたいと願いつつも、あくまで立ち居ふるまいの基準は他者のまなざしにある。レインの指摘に即せば、他者が「自分」を受け入れてくれる存在とは思えず、身体的自己を外側の自己（他者に向けてふるまう身体）と内側の自己（ひきこもる「本当の私」）に分け、他者からのまなざしを基準として外側の自己を偽装し、コントロールしようとする。しかし「本当の自分」を受け入れてくれる、わかってくれる他者などいないという「不断のおそれが」助長されていく。

ここで外側の世界を観察し、外側の自己をコントロールするもう一つの自己は「真空」である。言い換えれば「空虚な自己」である。なぜならば、外部世界と直接かかわるのは、あくまで内側の自己によって生み出された「偽装された自己」であり、図1で示したような生き生きとしたアクチュアルな現実との交流回路が絶たれるからである。外側の自己も、内側の自己も現実世界（他者）との直接的な交流回路が絶たれているために、現実世界・他者という存在それ自体が単なるモノとしてしか経験されなくなる。

反転図形の構図でいえば、他者のモノ化は自己のモノ化でもある。そうしたモノ化する自己において、内側の自己は、他者への観察によって主観的に現実世界を分析し、解釈し、再構成することしかできなくなる。そこには前節で紹介した村野の詩のように、世界を生き生きと感受し、刻々と変容するアクチュアルな世界に呼応して、躍動する自己はない。あるのは他者と身体的に対面的にかかわっていても、実質においては直接的なかわりをしておらず、相手を観察しながら間接的にかかわり、主観主義の世界を構成している自己と他者との関係の構造なのである。

その意味で2008年に起こった秋葉原の無差別連続殺傷事件は、犯行の狂気性だけが異様だっ

たのではない。救命に奔走する人びとと、凄惨な犯行現場を、手元のカメラ付き携帯電話で大勢の人びとが取り囲み、観察的に撮影しているシーンこそ異様だったのである。それは、1997年に起こった地下鉄サリン事件の際にも、サリンを吸い込んで駅の外でばたばたと倒れる乗客たちや駅員たちを、通勤で足早に通り返る人びとがまたいで行ったという光景の異様さと同じように<sup>5</sup>、現代を生きる私たちの自己は他者が風景でしかなく、モノでしかなくなっているということの証左ではないだろうか。

## 5. 終わらない「本当の自分」探し

ここまでで描き出してきた自己と他者の関係の構造、自己の存在の仕方は、しかし大人であれば、誰しもがどこかでもっている側面でもあるだろう。相手の出方をうかがい、相手に合わせることで、社交辞令をもってその場をやりすごすことなど、「そういうことはあたりまえ」といわれそうである。しかし、そうした他者に向けて自己を偽装し、観察的に操作的に世界（他者）とかわろうとする態度、言いかえれば仮面をつけてかわる態度をとりつづけることをすれば、いつしか仮面のつもりの自分が、あるがままの自分なのかそうでないのかわからなくなる。そのような経験世界を、人気ユニットのゆずは「仮面ライター」という歌の中で描き出している。

古びた町角の小さな今にも壊れそうな骨董品屋で  
丈夫そうだが気味の悪い笑い顔の仮面を買いました  
心の中まで覆い隠せると店主の老人は言葉ははずませる  
自分の胸の内を晒すのが怖いから誤魔化せそうなその仮面を買いました  
もう大丈夫 何も心配ない  
これでもう明日から 安心して生きてゆける …  
安心して生きてけるはずだったのに  
心の中に出来た空しさが日々の生活の中でポツカリと大きな穴を作っていた  
うんざりして仮面を 取ろうとしたけれど  
しっかりと食い込んで離しはしない …

お願い僕の仮面を剥ぎ取って  
お願い僕の仮面を引きちぎって

町中の人々が様々な事をしてみたが誰一人剥す事は出来なかった  
あれからどれくらいたったのだろう  
姿形は大人になったけれど本当の顔がどんなだったか忘れてしまった  
いったい僕は誰なんだろう？  
君は誰？

お願い僕の仮面を剥ぎ取って  
お願い僕の仮面を引きちぎって



お願い僕の仮面を剥ぎ取って  
お願い僕の仮面を引きちぎって

(作詞作曲 北川悠仁 2000年『トビラ』SENHA & Co. より JASRAC 出 0916918-901)

レインが指摘した身体的自己の分裂によって生じる「真空の自己」。「自分の胸の内を晒すのが恐いから」、他者に向けて偽装し、誤魔化そうとしてつけた仮面の自己。しかしそのことによって「安心して生きてけるはずだったのに 心の中に出来た空しさが日々の生活の中でポツカリと大きな穴を作って」いくはめになる。レインが指摘するように、「最初はあやふやながらアイデンティティの感覚をどうにか保つための手段として生じた内的自己であったのが、そもそもどんなアイデンティティから始まったかということさえ見失い始める」<sup>6</sup>。このような自己の在り方を図で示したのが図2である。

まさに「自分探し」といわれる事態は、内的自己として閉じ込められた、かつての身体的自己の残滓(＝「<sup>ざんし</sup>本当の自分」)の救済行為である。他者との相互的な関係性を失った内的自己はさらに分裂して、その内奥に後退する自己に「本当の自分」の幻想を探し求める。そうした内的自己の内部分裂は無限後退を繰り返し、そもそも「本当の顔(自分)」はどのようなものだったかさえ、わからなくなっていく。

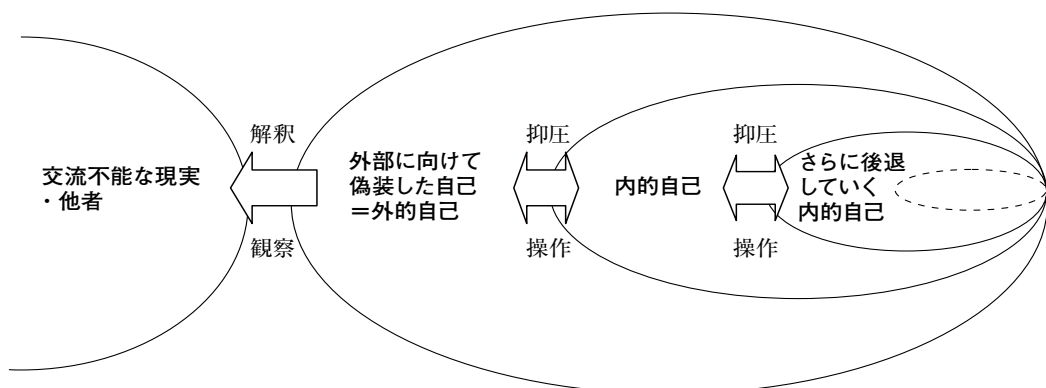
そこには、もともとが世界(他者)と生き生きとした交流において生成されていた自己が、固定化した実体(モノ)として自らをみなし始めたときからその生動性を失い、逆に分裂した内的自己によって終わらない「本当の自分」探しが発動するという構造がみえるのである。

しかし、それにしてもなぜこのようにしてまで他者や現実世界と直接的にかかわることを避けようとするのだろうか。そこには、「わたし」がかかわる他者のありよう、他者からのまなざしをどういう経験として受けとっているのか、という他者経験の問題に分け入らなければならない。

## 6. 差異を含み込んだ交換可能な「わたし」へと漂白するまなざし

私のまじめな性格からか、やたらと先生から優等生扱いを受けて、自分にとってはそれが

図2



重荷であった。そういうことが続くといつのころからか、本当の自分の考えというものが口に出せなくなった気がする。なんに関しても「あなたなら大丈夫」という周りの言葉は、励ましの意味で言ってくれているのかもしれないが、私自身首をしめつけられる思いをすることがある。

他者は、たとえ「優等生」としての「わたし」を褒めるつもりであっても、「わたし」にとっては一方的にまなざしをつきつけ、一定の関係性を押しつけてくる存在として経験される。このような日常の一見たわいもない、ささいなかかわりの瞬間において、居場所を奪う力が働くのである。浜崎あゆみもまた、デビューアルバムのタイトルソング「A song for XX」の中で、居場所のなかったかつての自分の思いを重ねつつ、そのとき他者がどのように経験されていたのかを歌っている<sup>7</sup>。

「いつも強い子だねって言われ続けてた／泣かないで偉いねって褒められたりしていたよ／そんなふうに周りが言えば言う程に／笑うことさえ苦痛になってた」(JASRAC 出 0916918-901)

ここでも自己が一方的に他者との直接的な交流から後退してひきこもるだけでなく、他者の側も一方的に「わたし」を意味づけ、位置づけてしまうという関係性の問題がある。

とくに「優等生」にせよ「劣等生」にせよ、成績という一般的な物差しにおいて、「わたし」という存在が意味づけられる経験は、差異を含み込んだ交換可能な匿名の誰かとして刻印づけられる経験でもある。とくに相対評価にあっては、評価による序列化はいっそう徹底された経験となって子どもたちに迫ることになる。そこではつねに帰属集団における「わたし」の位置が単一的な価値基準によって規定され、かけがえのない交換不可能な「わたし」という存在性が、一般化された匿名の誰かとして漂白されていく。

しかし、そこから超脱するにも、いまや友達と一緒に居たいがためにやむを得ず塾に通うという親子の事情もある。そこで身を置くのは、より苛烈な点数評価と序列化の経験世界であり、友達でありながら競争相手として、同調と排除の緊張関係に縛られる。

そして、このような同調と排除、仲よくしつつ競争させられるという両義的な関係世界において、居場所を奪う力が顕著にあらわれるのが、いじめの経験である。

小学2年のときにいじめを受けたが、その時私はその事実を親にはっきりと言うわけでもなく、先生に助けを求めるわけでもなかった。それは「居場所」を失いたくなかったからである。先生に言ってしまうと、もう私はいじめられず、無視されるかもしれない。そうすると私は一人になってしまう。独りぼっちになるくらいなら、“いじめ”という形であっても、人と関わっているほうが良いと思ったのだ。

ここにみられるいじめの構造は、第三者からきわめて見えにくい形をとっている。「独りぼっちになるくらいなら、“いじめ”という形であっても」人とかわかるほうを選ぶというのは、「無視される」という経験が、子どもにとって存在否定の刻印として、耐え難いものであるからだ。

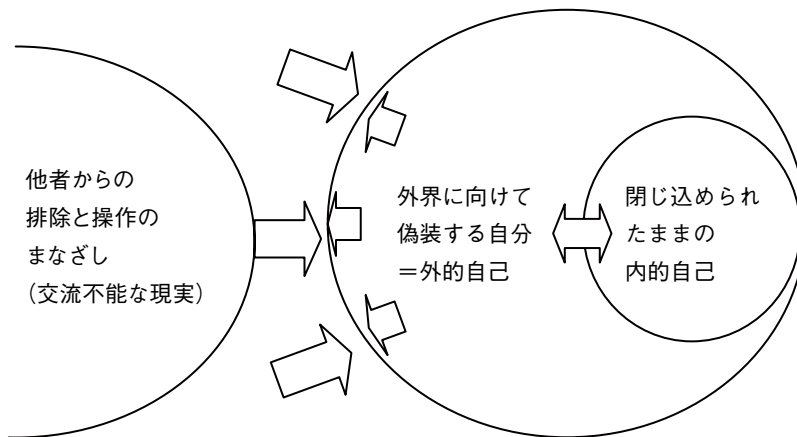
ここでも「無視」という一方的な関係性が居場所を奪う。身体的存在として「わたし」がこの場にいるにもかかわらず、「わたし」は場にかかわる余地もなく、宙吊りにされたままになる。

これまでみたように、子ども・若者の他者経験は、「わたし」を操作と排除においてモノ化し、匿名の誰かと交換可能な存在として刻印づけしてくる「暴力的な顔」として現象するのである。そうした他者経験を、前節で描き出された「ひき裂かれた自己」の図2と重ね合わせてみたものが図3である。他者からの操作と排除のまなざしにおいて、身体的自己はひきこもり、外的自己と内的自己にひき裂かれつつ、他者と同様に、自らも他者に向けて観察と偽装の自己を前線に送り込む。そうした自己と他者との間には生き生きとした活動的な交流はなく、深い楔<sup>くさび</sup>が打ち込まれる。そこに生まれるのはひたすら他者との差異において自己を確認しようとする、空虚な自己である。

## 7. 人生の方向性と「わたし」の喪失

最後に、居場所の喪失経験からみてとれる、もう一つの人間の生の側面を指摘しておきたい。それは、居場所が、子ども・若者の自己の方向感覚と自己主導性（self-directedness）・展望性（perspective）と深く結びついている点である。

図 3



僕たちは高校という場から常に「何か」を与えられていた。それは「授業」だったり「課題」だったり「宿題」だったり。そのことに対しては僕たちは何も考えずに、ただこなしていた。居場所を見つけている今の僕から見て、当時の僕は目標とするものが無かった。そして、夢という目標が無いから自分が無くなっていった。自分が無いから「場」にいる意味が分からなくなり、とりあえず学校は「何か」を与えてくれるからそれをこなすことで自分を保っていたと思う。

「夢という目標が無いから自分が無くなっていった」と語る「僕」のありようを反転させるなら、夢や目標といった展望感は、いまここにいる「僕」の存在意味を充溢させるものでもある。それ

は他者から一方的に与えられる「課題」や「宿題」といったものではなく、自らの内側から生成する目標や夢をさす。もちろん、同じ学校から与えられた課題や宿題だとしても、それらが自らの夢や目標と結びついていたり、それ自体に楽しみを感じたりすることは、「僕」にとっては有意義なものとなる。

他者と自己が相互に豊饒化する応答的な関係において、自らの位置をそのつどつかむことが居場所の獲得であるのであれば、「位置 (position)」は「わたし」の行き場と生き場を暗黙のうちにさし示し、自らの方向性を感得させる意味を含んでいる。

逆に私たちは方向感覚を失うとき、精神的に混乱をきたし、長く自己の安定を保つことはできない。そうした事態は周囲との関係を見失うときであり、自らの位置を確かめるすべを失ったときである。たとえば、足元も見えないほどの暗闇に身を置いたとき、私たちは手探りで周囲に触れるものはないかと探したり、互いに声をかけ合ったりしながら、いま自分がいる位置を確かめようとする。それと同時に不安に襲われる。とくにバリ島のんびりとは、北の方角を見失うと、ひどく精神的に混乱するという。そうした状態を「パリン」といい、それは「どちらが北かわからなくなる」という意味だそう。彼らの生活において、北の方角には山があり、山には神々が棲み、海には悪霊が棲んでいると信じられている<sup>8</sup>。そのため方角を見失うことは、彼らの意味世界自体が大きく揺さぶられることになるのである。

## 8. 居場所の構造——関係性・時間性・場所性

さて、ここまで居場所の獲得と喪失の経験を手がかりに、居場所の存立構造の解明を試みてきた。そこで明らかになったことを、整理してみると、居場所は場所性・身体性、関係性、時間性の大きく三つの構成要素から成ることがわかる。

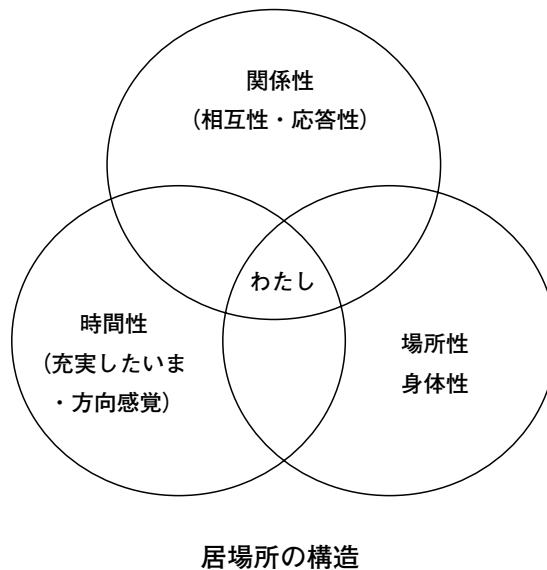
第一に場所性・身体性である。他者や事物、自然とのかかわりにおいて身の置き所や身を浸し、住まわせることのできる「隙間」があるかどうかが居場所の生成喪失に結びついている。また、身体は世界（他者・事物・自然）と「わたし」の経験の基盤であり存在根拠として身体があること、そうした「生きられた身体」が現実世界と出会い、交流し、自己と世界の意味の生成母体となり、感得する基盤となっている。

第二に、関係性である。現実世界との生き生きとした活動的・応答的なかかわりにおいて、世界と自己の意味が生成し、「わたし」という身体において感得される。逆に、他者からの操作的・排除的な関係性、言いかえれば他者からの一方的な目論見をもった関係性や、外部に向けて偽装する自己をもって他者と操作的にかかわろうとする関係性では、生き生きとした現実との交流回路を断絶させ、自らの位置取りを見失う。

第三に、時間性である。他者との応答的な関係においてそのつど獲得される自らの「位置」が、私たちの方向感覚を生み、展望感覚を生み出している。そうした内から生成する展望感覚において、「いま」という時間とここにいる「わたし」の存在意味が充溢される。

以上の三つの構成要素は相互浸透的に互いに絡みあい、「わたし」という存在を支えている（それを図で表したのが、図4である）。その意味で、居場所というのは、自己と他者・事物・自然との応答的な関係において生成し、生きられた身体（身体的自己）において感得される「わたし」の生成母体といえるだろう。

図 4



このように了解するとき、「わたし」という存在を根底において支え生み出す、さらなる始原の関係世界への感受性と関係性を取り戻す場としての「居場所」が求められていることに気づかされるのである。

#### 註

- 1 藤竹暁 編著『現代人の居場所』至文堂、2000 年は、子ども・少年少女、夫・妻・家族、男と女、ホームレス、高齢者、女子大生といった多様な対象と居場所を結びつけた意欲的な論考で編纂されており、居場所という言葉の射程の広さ多様さを感じさせる。
- 2 矢野智司「非知の体験としての身体運動」『体育の科学』1998 年 10 月号、785-789 頁。
- 3 それは、共依存関係とは異なるものであることも急いで断っておく。こうした自己と世界の溶解体験は「わたし」の主観的世界に世界（他者）を同化させることでも、世界（他者）に同化することでもない。共依存を誘発させる自己の存在様式とは、自己と他者との境界を踏み越えて、一方的に他者の世界に侵入し、ひたすら自己の主観世界に相手を道具化しようとする関係性である。その意味で、自己と世界との溶解体験、自己と他者との相互浸透的な関係を、身体的自己の延長によって他者や世界と同化する過程として解釈をする矢野泉（『多文化共生と生涯教育』明石書店、2007 年）の批判は誤読である。矢野の議論の前提にあるのは人間存在の前提をユニークな実存としてではなく、自己と他者の在り様を交換可能な匿名の一般的存在から出発させ、差異と同化で存在証明をしようとする人間観に端を発していると思われる。
- 4 R. D. レイン『ひき裂かれた自己』みすず書房、1971 年、104 頁。
- 5 辺見庸『不安の世紀から』角川書店、1997 年。
- 6 R. D. レイン前掲書、108 頁。
- 7 作詞 浜崎あゆみ 作曲 星野靖彦『A song for XX』avex、1999 年より。
- 8 中村雄二郎『魔女ランダ考』岩波書店、2001 年、39-40 頁。